

## D. デフォーの奢侈論

——ジェントルマン論からの再考——

鈴木 康 治

### I はじめに

『蜂の寓話』の出版を皮切りに18世紀イギリスにおいて奢侈論争が新たな展開を見せる中、B. マンデヴィルと同時代にあって、同書の奢侈是認論がもつその経済論としての正当性を理解し、それを支持した論者のひとりがD. デフォーであった<sup>1)</sup>。J. R. ムーアも指摘するように、デフォーは『ミスト』誌上において匿名ながら『蜂の寓話』に直接言及しつつ、マンデヴィルについて批評を加えている (Moor 1975, 124-25)。デフォーはその中で、「『蜂の寓話』という本には、良くも悪くもこの著者のこれまでの主張がすべて盛り込まれている。公益的な観点から悪徳の許容を最初に論じたのはこのジェントルマンである」(Defoe 1727, 237)と明言する。デフォーの経済論の基本的主張もマンデヴィルによる奢侈是認論の方向性を共有するものである。すなわち、社会の経済的發展という公益促進の大目的の前では、道德論を経済論に従属させる思想的傾向をもっているといえる。デフォーは自身が編集主幹を務める雑誌『レビュー』その他において、マンデヴィル奢侈論の経済論としての正しさを支持している。例えば、デフォーは、「経済論 (the Language of Trade) としていえば、種々の悪徳 [奢侈] は美德となる。奢侈品も必需品も同じく必要なものである」(Defoe [1704-13a] 1938, 136 (6))

と論じている。デフォーにはまた次のような言述もある。

確かに、イングランドの貴族やジェントリによる奢侈や散財が、これまでも庶民の利益となり、今日に至って経済をかなりの部分にわたって支えている。とくに今日では、そうした散財が長年続いてきたという理由から、この有害な愚行を支える交易に、多くの人々が依存するという事態となっている。(Defoe [1704-13b] 2003-07, 58 (3))

悪徳としての奢侈が経済活動にとっては美德となるとの論理は、デフォーの諸著作に散見される。中でも『イギリス経済の構図』では、マンデヴィルという名の直接的な言及こそないものの、「われわれの奢侈は通商上の美德になっている」という『蜂の寓話』を想起させる一文を引用し、「われわれの贅沢は、わが貿易の生命であり魂である」と付言している (Defoe [1728b] 2000, 228 / 訳 1975, 183 / 訳 2010, 149)。

その一方で、デフォーはまた、18世紀イギリス社会の奢侈的な風潮に対して終始批判的な見方をしていたことも事実である。デフォーは奢侈の悪徳性を認め、奢侈の蔓延が社会秩序の安定性を動揺させる危険性を指摘する。

昨今の奢侈を放置することは国の亡びであ

る。経済活動は株価ゲーム (game in Stocks) となる一方で、国民はみな分を超えた生活をする中で、つまらないものに金を費やしている。茶とワインとがみなに関心事である。それでも神の恵みは、感謝を忘れた者たちにもたらされる。ために、国民は自分たちの生産物をないがしろにする。…穀物を始めとして必需品の価格が高いのはけだしこのためである。みなでワイン業者のために働いては、せつせと物価を吊り上げて生活を苦しめている。自業自得とはこのことである。(Defoe [1728a] 2000, 278)

デフォーのこうした二面的ともいえる奢侈に対する見解をどう理解すればいいのであろう。デフォーにおいては、奢侈をめぐる経済論と道德論というそれぞれの文脈からの別個の議論が接合されることなく並存しているということであろうか。

## II 奢侈をめぐる道德論と経済論

デフォーの奢侈論に関する先行研究の中には、奢侈に対するデフォーの態度の二面性や曖昧性を指摘するものが多い。例えば、H. H. アンダーセンは、「デフォーの著作は、彼の時代における道德論と商業主義との対立を体現するものである。デフォーはその撞着の客観的分析に際して、マンデヴィルほどにはその姿勢を徹底化させることがなかった」(Andersen 1941, 46)としている。ムーアは、社会・経済思想という観点から比較して、デフォーの主張の基本線はマンデヴィルとほぼ同じものであるが、「私悪は公益」という社会的帰結に関しては、議論の主題によって両者の見解が分かれる場合があるという事実を指摘する。そして、その理由を、デフォーが多くの諸主題を論じる中で、主題間に相互に排他的な性格の議論を含ませている点に見る (Moor 1975, 119)。また、P. アールは、悪徳である奢侈が経済的な有用性をもつという

「この逆説的命題は道德を論じかつ経済を評するデフォーをとりわけ悩ませることとなり、その所論を驚くべき撞着に導いてしまった」(Earle 1977, 152)と述べている。ムーアらのこの主張は、デフォー思想にその論理体系としての斉一性を見ないもので、奢侈論についてもその二面性を黙認するものであろう。天川は、「デフォーは終始一貫イギリス経済の偉大さの中にその『巨大な消費』の持つ重要性を認めていた」(天川 1966, 98-99)と指摘するものの、デフォーの思想とは、18世紀初期における「ピューリタン倫理としての禁欲と経済的要請としての奢侈是認との間に、動きがとれなくなった当時の時代思想の矛盾と混乱」(天川 1963, 73)との縮図であったとする。そして、天川もまたデフォーの奢侈論については結局、その曖昧性を指摘することで結論とするのである。他にも、山下は、『レビュー』誌を引用しつつ、デフォーには、確かに奢侈の経済活性化の機能を認める言述があることを確認した上で、「しかし、こうした奢侈的産業にまさって、大衆が日常消費する必需品(家具、衣類、食糧など)の生産とその消費にこそ、国民経済再生産の主流があることを彼[デフォー]は知っていた」(山下 1968, 233)と続ける。既出のムーアも同様に、デフォーが経済論としての奢侈の重要性を知悉しながらも、その最終的な奢侈に対する態度はマンデヴィルとは異なり、奢侈の蔓延は亡国の要因であるとの批判的な見解をとるものであったとしている (Moore 1958, 322-23)。

こうした先行研究の議論は、デフォーとマンデヴィルとの両者について、奢侈に対する是認の立場は同じとしつつも、それぞれの背後にある道德(政治)論的な志向性の相違にまつわる奢侈是認論としての微妙な力点のずれを指摘するものである。その中で、デフォーの奢侈論には、見解に二面性あるいは曖昧性があることが強調され、それがデフォーにおける道德論と経済論との齟齬の問題として把握されている<sup>2)</sup>。

しかしその一方で、デフォー思想についてはまた、マンデヴィルとの近接性もしばしば主張される。とりわけ、その前提とする人間観について、デフォーの想定する人間観をT. ホップズやマンデヴィルのものと同じ線上に置かれるものとする指摘は多い。M. E. ノヴァクは、デフォーの小説の主人公たちに共通する行為基準としての生命の安全や必要の第一義性ということ、つまりは行為動機においてそれらを徳や義務などに優先させる傾向性に注目して、そうしたデフォーの人間本性観は、ホップズ、B. スピノザ、マンデヴィルらとの近接性を示すものであるとする (Novak 1963, 66-67)。B. ダイクストラはデフォーにおける人間の行為動機の根本的な悪徳性という想定は、ホップズ、J. ロック、マンデヴィルなどの議論と同一のものであるとする (Dijkstra 1987, 159)。また、V. O. バードソルはとくにそのホップズ的な人間観との同型性を主張して、デフォー思想の中にホップズおよびロチェスター (J. ウィルモット) からの影響関係を見ようとしている (Birdsall 1985, 19-21)。バードソルは、「ホップズとデフォーは、共に、神を求めると貨幣や地位を求めるとは同一の動機に発するものであることを認識していた。つまりは、『力への欲望』という動機である。その背後に平和や安全、恐怖からの自由という欲望があるのである」(Birdsall 1985, 19)と述べている<sup>3)</sup>。デフォーの人間観が、その行為動機の主動因として生存に関わる欲望を保持しているとする主張は、デフォーの著作の初期から確認できることであり、この点はデフォー思想に一貫する諸個人の行為類型であったといえる。デフォーは『プロジェクト論』でも次のように述べていた。

人間は神の創造物の中で生きていくことが最もままならないものである。普通、人間以外の動物が餓死することはない。外なる自然には衣食の資が十分にあり、内なる自然はそれ

を生活の用に供する本能を与えている。ひとり人間のみが、必死に働くことで飢えや死から逃れなければならない。(Defoe [1697] 2002, 5)

このようなホップズやマンデヴィルとの思想的立場の近接性を認めるデフォー解釈を採用することで、デフォー思想の曖昧性は一見、解消されるようにも見える。というのも、バードソルの言述にあるように、このデフォー解釈に立つとすれば、デフォーの人間観にはその行為類型において道徳論と経済論との相反はもはや問題として存在しないからである。しかし、奢侈の問題とは、少なくとも諸個人の生存や安全とは直接的な関連をもつものではない。とすれば、こうしたデフォー解釈は、その奢侈論においても妥当するであろうか。検討の余地は残るであろう。

このようにデフォーの奢侈論に対する先行研究の評価を見ると、デフォー思想における道徳論と経済論との不整合性の有無という、より根本的な問題が改めて浮き彫りにされることがわかる。ノヴァクは、「デフォーほど逆説性を抱えた思想家はいない」(Novak 1963, 21)と述べる。デフォーの思想とは、道徳論と経済論との間において不整合を抱懐するものであろうか。この問題に答えるための鍵は、デフォーの述べる奢侈概念を詳細に検討することから見えてくるであろう。奢侈論ということで、デフォーが捉えていた18世紀イギリス社会の問題とは何であったか、この点を明らかにすることは、デフォー奢侈論の位置づけ、つまりは、デフォー思想における道徳論と経済論との関連性を明らかにするという点でもあるからである。結論を先取りするならば、デフォーの思想とは、社会理論としての論理の斉一性を示すものであるといえる。その斉一性は、奢侈論においても当然に保持されている。道徳論と経済論との間のデフォー思想の不整合という問題は、デフォー

思想の表面的な理解から生じる産物であり、デフォーの社会理論の根幹を見落とすものである。さらには、デフォー思想にあっては道徳や経済の諸問題が、むしろその奢侈論において統合的に捉えられ、方策が論じられている点を見逃してしまうという重大な危険性をそこに孕むものである。

本稿の課題は、こうしたデフォーの奢侈論の言説にまつわる問題性を糸口として、デフォー思想の中にその消費論としての含意を見出すことである。ここで、デフォーの消費論として意味するものとは、貨幣の稼得および支出の仕方に関するデフォーの諸論述のことである。ここには奢侈論の言説も含まれる。以下に見るように、とりわけ、その支出の仕方、すなわち消費の仕方の相違を基準として行為類型の善し悪しを判断する議論をデフォーは諸著作の中で展開している。デフォー思想が含む貨幣支出の仕方に関する諸言説を「デフォーの消費論」として再構成するという試みにおいて、そうした言説間の論理的つながりを明示し、そこにひとつの消費論としての論理的輪郭を与えることが本稿の企図である。こうした観点に立てば、デフォーの奢侈論の言説についても消費論の一環としてその再読が可能となる。以下では、浩瀚かつ広範なデフォーの諸著作の中、その奢侈論が展開されているデフォーの社会・経済思想について、とくにそのジェントルマン論の部分を中心に検討を加える。そこから、ジェントルマン論と奢侈論との関連性、およびそれらの間の消費論的な接合可能性を論証することで、その消費論としての議論の輪郭を析出する。その結論として、デフォーの思想には、ジェントルマン論の一側面というかたちでの独自の消費論の内在が指摘できるであろう。

### III 奢侈と社会秩序の紊乱

#### 1. ジェントルマン層の放恣と奢侈的消費

デフォーは歿後出版となった未完の論考『イ

ギリス・ジェントルマン大鑑』の書き出しで、ジェントルマンを2種類に分けている。生得(the born)ジェントルマンと生育(the bred)ジェントルマンの2つである(Defoe [1890] 2006, 3)。デフォーの意図は、この両者の対比によって、生育ジェントルマンについてもジェントルマンという呼称の正当性およびその社会的な重要性を論証することであった。

デフォーの生得ジェントルマン論とは、ジェントルマンとしての個人的資質を欠く当世の生得ジェントルマン層に向けた批判である。デフォーは、学識や道徳性の欠如がジェントルマンとしての地位の形骸化を招くものであることを指摘し(Defoe [1890] 2006, 5)、その成長過程での然るべき教育の有無が生得ジェントルマンのその後の人生をどれだけ違ったものにするかについて述べる。学識を身につけた生得ジェントルマンは、成長して国政に携わり、君主や国民をたすけて国家の誉れとなる。他方で、学識を欠く生得ジェントルマンは、長じて国政に携わることもなく、「快楽に耽り、その存在する意義とはあたかも家名を後代に引き継ぐことのみであるかのようなものである。その青春は放蕩と怠惰と安逸の中に過ぎ去り、無思慮と浮かれ騒ぎと放蕩のうちに老いていく。後にはこの同じ虚ろな生を繰り返すためだけの財産を残すのみ」(Defoe [1890] 2006, 8)である。さらにデフォーは、ジェントルマンとして生まれたものは、教育をむしろ忌避すべきであるとの風潮が蔓延していることを痛罵する。無学であることは不幸なことであるのに、それを自ら選択することは愚であり、ましてや無学を誇るなどということは極悪の極みであった(Defoe [1890] 2006, 238)。それはデフォーにしてみれば、まったくの謬論であった。

デフォーは、ジェントルマン層が今日の窮状にある原因についても、その教育の欠如を第一の理由としている(Defoe [1890] 2006, 176-77)<sup>4)</sup>。デフォーにとって、無知で無学な生得



ジェントルマンは社会に奢侈を蔓延させる元凶である。ジェントルマンが奢侈を蔓延させる原因は二重である。ひとつは自らの経済生活を管理する能力や関心がないことからジェントルマン層の生活は放恣となり奢侈に流れることであり、もうひとつはジェントルマン層の行為が社会的な模範であり、下の諸階層の人々がそれを模倣することで社会全体に奢侈の風潮が拡大することである。当世のジェントルマン家庭には「流行の奢侈品を求めて濫費するため、金のかかる生活」(Defoe [1890] 2006, 245) が普通となっているとデフォアは述べる。デフォアによれば、こうした奢侈的な生活を送ってその収支を顧みることがないという事実が、彼らに家計の管理能力が欠如していることを証しているということになる。

では、ジェントルマン層の奢侈的な生活は、どのようにして始まったのであろうか。デフォアは奢侈が蔓延してきた経緯を次のように振り返っている。

デフォアは『レビュー』誌において、奢侈の始まりを「ジェントリの致命的な過ちの元」(Defoe [1704-13b] 2003-07, 59 (3)) であるという。その奢侈的な慣習の始まりは、ヘンリー7世である。ヘンリー7世は貴族やジェントリの特権を剥奪したり、自由や憲章を侵したりすることなく、ただ宮廷の姿(在り方)を華美で奢侈的なものに刷新してみせることで、結果として彼らの生活から壮麗さを剥奪することに成功したのである(Defoe [1704-13b] 2003-07, 59-60 (3))。このヘンリー7世の策略の成果は、その子ヘンリー8世の時代に結実することとなる。ヘンリー8世もその父に倣い、豪華な宮廷の風潮を一層徹底化させていった。貴族とジェントリは恒常的に金のかかる生活様式を余儀なくされていき、勢力を削がれた貴族とジェントリは、その俸禄や領地や官職を安泰とする必要から国王に完全に従属することとなった。高慢なイングランド貴族を抑える唯一の方策は彼ら

を貧しくすることであるということが、ヘンリー7世の策略の原理であった。ただし、国王が自ら武力によってそれを行なうのではなく、餌をちらつかせて貴族自身がそうなるように仕向けることが肝要であった(Defoe [1704-13b] 2003-07, 63 (3))。

貴族による濫費は経済を活発化することとなった。従来は軍事に費やされていた資金が、いまや衣服や調度品や玩具など、くだらないものに向けられるようになった。その結果、これら奢侈的な商品を取引する業種などが拡大した(Defoe [1704-13b] 2003-07, 63 (3))。奢侈的な慣習の導入は、当初、外見には社会的な変化をもたらさないかに見えた。というのも、貴族の莫大な支出は旧来と同様に経済を潤していたし、ジェントリの濫費は正規のやり方とは違やかたちではあるがその体裁を保つことができたからである。ただし、そういう中でも社会的な変化は着実に進行していたのであり、それは経済の構図を奢侈的な性質のものへと再構成することで、イングランド社会の階序の基盤を徐々に揺るがしていくこととなる。

ジェントリの奢侈とは社会の悪徳である。しかし、ひとたびこうした奢侈的な生活が定着してしまうと、ジェントリの奢侈的な消費を抑制することは、経済に悪影響を及ぼすこととなる。デフォアの時代のイギリス社会は、もはやこの段階に入っていたのである。ジェントリの道徳的に有害な奢侈的消費は、経済論の観点からは有益なものである。デフォアは「生活様式を改善しようとするれば、必ずや製造業(Manufactures)を損なう。悪徳を矯正しようとするれば、商業(Trade)が沈滞する」(Defoe [1704-13b] 2003-07, 64-65 (3)) として、18世紀のイギリス社会における二律背反を論じている。この道徳論と経済論との間の相反に直面して、デフォアの出した建策は中庸(Medium)の消費という提案であった(Defoe [1704-13b] 2003-07, 63-65 (3))。デフォアによると、今日のイングランド

社会における害悪のすべては、事物がその中庸を乗り越えて過度であるという点に尽きるという (Defoe [1704-13b] 2003-07, 64 (3)). 宮廷の華美や豪華は今日あまりにもその度が過ぎている。さらにはそうした奢侈に過ぎる慣行は、国民全体に拡大してしまっているとデフォーはいう。したがって、仮に今すべての奢侈的消費を止めさせてしまうと、経済への悪影響は計り知れないものがある。国民の多くがその就業を社会的な虚栄の産業に依存している今、貧民の多くを飢えに直面させることとなっても、なお奢侈という悪徳の抑制を推進する政策は、奢侈を放置する場合と比べてどちらが政策として致命的かの判断さえ下せない程である (Defoe [1704-13b] 2003-07, 64 (3)). もはや、経済において悪徳と濫費とは不可欠なものとなっている。そのため、「道徳と経済の双方における過度を排してその中庸を見つけなければならない。その中庸とは、今日の流行や慣行における濫費を、[消費における] 社会的体裁を失わない程度に抑制するということ、別言すれば、有害な習慣を改善しつつ経済を破綻させないようにすることである」 (Defoe [1704-13b] 2003-07, 65 (3)) とデフォーは述べている。こうしたデフォーの奢侈論には、悪徳としての奢侈ということを過度の消費という点にのみ限定して、奢侈の抑制と経済の保護との両立を図ろうとする傾向が見出せるであろう。

## 2. 下流層の専横と顕示的消費

宮廷を中心とする貴族やジェントリなど社会の上流層による奢侈的な生活様式は、次第に下層の階層へと滴下的に浸透していく。奢侈的な生活様式が、いわば流行として模倣の対象とされることで、徐々に社会全体に蔓延していくこととなる。デフォーは流行について、それは国家を堕落させるものであるとする (Defoe [1725b] 1869, 439-41 (3)). デフォーにとっての流行とは、社会全体が放蕩であることの証で

ある。流行は好ましくない影響を人々に与えるとした上で、「今日では流行やモードの悪影響が道徳や宗教にまで及び、さらには人々の感情や精神にまで支障をきたしている」 (Defoe [1725b] 1869, 440 (3)) と警告している<sup>5)</sup>。以下、流行として広まった下流層の奢侈について見ていこう。

デフォーは奢侈が下層の階層へと拡大していく過程を論じている。それによると、奢侈が普及する遠因はジェームズ1世の時代にあった (Defoe [1724] 2007, 70-71)。ジェームズ1世のとき、宮廷の華美はその度を強め、「奢侈はその地歩を確固たるものとした」 (Defoe [1698] 2007, 26)。ジェームズ1世時代の宮廷はイングランド史上最も墮落した宮廷であり、そこでは国王に倣って、貴族やジェントリや廷臣らがこぞって「仮面舞踏会や観劇、酒宴にうかれ騒ぎ、その他ありとあらゆる奢侈」 (Defoe [1724] 2007, 71) に耽った。

こうした奢侈の風潮は次の国王チャールズ1世時代にも継続した。チャールズ1世自身は節度と自制心とをもった優れた人物であったとデフォーは評する。しかし、奢侈はすでにその地歩を固めてしまっており、悪徳に慣れ切った廷臣たちの放蕩や奢侈を抑制することはできなくなっていた (Defoe [1724] 2007, 71)。さらに悪いことは、国王が内戦のために軍を編成する必要に迫られたことであったとデフォーはいう。というのも、国王軍は義勇兵によって構成された結果として統制が弛まざるを得ず、そのために人々、なかでも指揮官であるジェントリの道徳が腐敗を極めることとなったからである (Defoe [1724] 2007, 71)。指揮官の品行の乱れは、一般の兵士にも伝染する。そしてついにチャールズ2世のときに墮落は最高潮となったとデフォーは述べている (Defoe [1698] 2007, 27)。

奢侈が兵士から広く庶民層一般へと拡大するのは王政復古後のことであるとデフォーはいう (Defoe [1724] 2007, 72-73)。この王政復古直後

の時期、宮廷では平和が戻ったことで浮かれ気分が再度支配的になっていた。こうした祝福気分が暴飲の風習を貴族やジェントリに蔓延させることとなる。デフォーは暴飲について、それこそが諸悪の根源であるという。暴飲は「売春、賭博、窃盗、殺人、強盗、詐称、詐欺などの犯罪、そしてとくに暴言」(Defoe [1724] 2007, 75)を生み出す元凶である。下流層の専横という事態の一因は、この暴飲という習慣の上に種々の悪徳や犯罪が叢生することからくるというのがデフォーの主張である。

デフォーは下流層の専横を生み出す原因をもうひとつ指摘する。それは労働者、とりわけ使用人に支払われる賃金の高さである。デフォーは、「ひとえに賃金の高騰ということが、使用人たちの傲慢さを助長しているものである。そして、怠惰に流れるのは、その生活が墮落していることに原因がある」(Defoe [1724] 2007, 84)として下流層の専横を論じている。デフォーは、昨今の下流層の態度について、「今の労働者は、自分の仕事ではなく、自分の賃金に気をとられている。賃金さえ満額貰えれば、あとの仕事はできるだけ手を抜こうとする」(Defoe [1724] 2007, 78)と述べる<sup>6)</sup>。デフォーにしてみれば、こうした下流層の道徳性の欠如は、その専横を生み、社会に奢侈や放蕩をはびこらせ、延いては社会の階序を揺るがす危険性をも孕むものであった。

賃金の上昇は、必ずしも下流層の富の増加につながるものではないとデフォーはいう。その理由は、下流層がその上昇分を奢侈や虚飾のために費やしてしまうからである(Defoe [1724] 2007, 84)。とくに、男性の使用人らは飲酒に、女性の使用人らは華美なものごとのために費やしてしまう。中でも、デフォーにとってはやはり暴飲が最悪の習慣である。デフォーは、「彼ら[使用人]の節度はすべて吹き飛んでしまい、高慢と放蕩を抑えられなくなる。まったくもって酒のためである」(Defoe [1724] 2007,

84)と書いている。それゆえ、デフォーによれば、貧困層は、賃金上昇したことで、逆にその生活は以前より困窮してしまったのである。

こうした奢侈で傲慢な下流層の中でも、デフォーはとりわけ女性の使用人がもつ社会的な悪影響を重大な問題として考える。社会秩序の安定性を紊乱する程度がより深甚であるからである。デフォーは女性の使用人が招く社会的な害悪の範囲について、その波及の連鎖を次の3段階に区切って提示している(Defoe [1725a] 2004, 9-10)。

- (1) 使用人たちの振る舞いが悪い模範となって、子供や他の使用人たちを感化する。
- (2) 使用人たちの華美で高価な服装は、雇われ先の妻や娘たちの服装をより華美で高価なものにする。こうして次々に服装において上位に立とうとする競い合いが社会全体の女性を巻き込んで行なわれるようになる。女性の関心事は見栄の張り合いと服装の豪華だけであるかのような様相を呈していく。
- (3) 男性の使用人たちが不満を募らせ、賃上げを要求してくる。

ここで明らかなのは、デフォーが、女性の使用人が社会秩序に与える害悪として挙げている3つの事柄は、核心の部分でそのすべてが消費に関連するものであるということである。デフォーが使用人の奢侈の悪影響として述べる問題とは、つまりは顕示的消費に関わる危険性のことである。デフォーは、「女性は、服装だけで主人と使用人とを区別することは非常に難しい。使用人の方が上等な身なりをしていることもしばしばである。…使用人たちはこのなんとも高慢な見栄を維持するために、賃金を前代未聞なまでに吊り上げているのである」(Defoe [1725a] 2004, 5)として、顕示的消費にまつわる身分的階序の紊乱を告発している。この奢侈

的な風潮は、富や消費生活を基準とするような経済的な差異としての新たな階序を形成していくこととなる。デフォーの奢侈論とは、この点において、奢侈の蔓延という事態が社会秩序の根幹に関わる重要な問題性を内在させていることを的確に捉えるものであったといえよう。

#### IV 消費と社会秩序の再構築

##### 1. 社会の階序とジェントルマンの有徳性

デフォーはジェントルマン層の行為が社会的な影響力をもつことを指摘する。ジェントルマンは、聖職者と並んで、社会の指導者たる地位を担うものである(Defoe [1698] 2007, 30)。ジェントルマンはこの社会的な地位ゆえに行為の影響力が大きいのである。ただし、その影響力の大きさは正負の両面にわたるため、その作用が道徳的な墮落をもたらすこともある。今日の墮落した社会状況とは、まさにジェントルマン層が奢侈で放蕩で不道徳であることに由来する、負の影響力が作用していることの帰結であった。貧困層の悪徳の悪い影響が及ぶのは当事者個人だけであるが、ジェントルマンの悪徳はその影響を広く社会の有徳な人々にまで及ぼす。したがって、まず匡正されるべきはジェントルマン自身の態度や考え方であった。

上述のように、今日の奢侈的な風潮の蔓延は、宮廷およびそれを模倣した上流層の奢侈がその始まりであった。上流層の奢侈が社会の下層の人々に模倣されて拡大していったのである。とすれば、これと逆の論理が、奢侈を抑制するときにも同様に成り立つはずであるとデフォーはいう(Defoe [1698] 2007, 35)。まして、「今日のイギリス社会では、流行や習慣からの影響が計り知れないほどの力をもつ。ジェントリがよくその悪徳を抑制するならば、悪徳行為はすぐに廃れるであろう。ただし、それを強制的にやろうとしても無理なことである」(Defoe [1698] 2007, 37) というのがデフォーの見通しであった。

デフォーは社会の指導者として相応しいジェントルマン像をどのような人物として構想したのであろうか。この答えこそ、生得ジェントルマンに対比されるべき、生得ジェントルマンとしての行為類型である。もっとも、既述の通り、デフォーの生得ジェントルマン論は未完となっている。しかしその内容のかなりの部分はデフォーの他の著作から窺知することが可能である。その著作とは、デフォーの『イギリス商人大鑑』のことである。同書を一読して分かること、それは同書の内容がまさに生得ジェントルマン論に他ならないことである。商人層に生まれた者、あるいはまた、たとえその出自がジェントルマン層や貴族であっても商人としての道を歩むこととなった者、こうした人々が商人としての経験を積み、経済的な成功を取める中で生育され、後にはジェントルマンと呼ばれるに至る<sup>7)</sup>。『イギリス商人大鑑』とは、商人としての諸個人がこうした過程を経てジェントルマンとなるまでに必要とされる諸要件についての指南書としてデフォーが企図したものである。それは実務における手引であり、同時に、仕事に対する誇りと優れた人格とを身につけるための教本でもあった(Shinagel 1968, 211)。

デフォーは『イギリス商人大鑑』の中で、まず勤労の重要性を説く。確かに現代は暴飲や贅沢の習慣がはびこる奢侈的な時代であり、生活費も高騰しているとしながら、しかし、「商人にとっては、本業をおろそかにすること以上の悪徳はない」(Defoe [1725c] 2007, 40) とデフォーは述べる。むしろ商人であるならば、仕事に喜びを見出すようにしなければならないと説くのである。仕事に喜びを見出した商人が、勤労でないはずはなく、そうなれば、「いずれは出世して後進を指導する人間となろう」(Defoe, [1725c] 2007, 40) とデフォーは述べている。したがって、娯楽や気晴らしなどは、本業に支障をきたさず、自己の評判も貶めることのない範囲に止めることを旨とすることとデフォーは



規定している (Defoe [1725c] 2007, 79).

デフォーは勤労の次に重要なこととして、支出に関する問題を取り上げる。それは、商人の消費生活についての注意点である。生活費が高む理由にはいくつかの要因がある。デフォーは以下の4つの理由を挙げる (Defoe [1725c] 2007, 86)。

- (1) 高額の生活費：家内の贅沢にかかるもの
- (2) 高額の服飾費：上質の衣服を着る贅沢にかかるもの
- (3) 高額の交際費：分限を超える付き合いを続けるためにかかるもの
- (4) 高額の家財費：世間体を気にすることでかかるもの

今日の社会では、節約や質素ということがまったく廃れてしまっているとデフォーはいう (Defoe [1725c] 2007, 86)。その結果、生活にかかる経費がその収入の範囲を超えてしまい、ついには破産に追い込まれるということが多発することとなる。ここで当然に、デフォーとしては、こうした度を越す出費を誡め、節儉の重要性を縷説していくこととなる (Defoe [1725c] 2007, 84)。

こうして、デフォーは勤労と消費という経済生活の両面にわたって商人としてあるべき規準を提示している。デフォーの理想とする商人像とは、本業に精を出し、支出の節約に努め、信用を失うことのない個人である。そうした諸個人は経済的にも人格的にも成功を収めて出世していくこととなる。そうした人々の中から、やがて真にジェントルマンと呼ばれるに値する人々が陸續として現れてくることとなる。デフォーのいう生育ジェントルマン層である。

将来の生育ジェントルマン層たる商人層は、実際にデフォーの時代のイギリス社会において勤労と消費とをつなぐ結節点としての役割を担う存在であった。デフォーは国内商業 (inland

trade) という概念を用いて当時のイギリス社会の経済発展論を展開する。デフォーのいう国内商業とはイギリス内部の流通圏を指す言葉ではあるが、その範囲にはイギリス植民地や他国との貿易も含まれる (Defoe [1725c] 2007, 252)。この国内商業において流通・販売に携わり、勤労の成果物である諸財と商業の最終目標点である消費者とをつないでいるのが商人層である (Defoe [1725c] 2007, 252)。デフォーは『イギリス国内商業事情』において、ロンドンを一大集散地とするイギリス経済の流通網の偉大さを描いている。その中でデフォーは、ロンドンの卸売商をその与信力をもって「商業全体の支え (the support of the whole Trade)」であると評価し、他方で、小売店商を、最終の消費者へとすべての商業的営為を到達せしめるというその役割をもって、まさに「商業のいのち (the Life of all our Trade)」であるとまで述べている (Defoe 1730, 21-22)。こうした商人層の作用によって、「中国の茶、アラビアのコーヒー、アメリカのチョコレート、モルッカ諸島の香辛料、カリブの砂糖、地中海諸島の果物」(Defoe 1730, 21) といった世界中の物産がもはやイギリス国内のどこにおいても消費可能である<sup>8)</sup>。イギリス社会は対外交易や植民地交易からもたらされるこうした諸財を大量に消費することを可能にしつつ、国内にあっては新しい消費文化や生活スタイルを生み出し、国外にあっては植民地帝国の建設へと着実な歩みを見せていくこととなる<sup>9)</sup>。生育ジェントルマン層とは、植民地帝国へと邁進する18世紀のイギリス社会にあって、とりわけその経済面の支えとして勤労と消費とを結ぶ重要な役割を果たしていたのである。この点において、生育ジェントルマン層は、名実ともにイギリス社会の指導的立場を体現する存在であったといえる。

デフォーは商人として経済的に成功した諸個人がジェントルマンとなり、社会を経綸することが社会秩序の再構築につながると考える。デ

フォーは、「台頭する商人層はジェントリへと上昇し、没落するジェントリは商工業界へと身を沈めていく」(Defoe [1728b] 2000, 132 / 訳 1975, 28 / 訳 2010, 20) として、生育ジェントルマンが生得ジェントルマンに代わって上流層としての地位を占めることとなる論理を階層間の流動性として示している。もっとも、デフォーによれば、イギリス社会とは、元来より貿易国家 (trading country) であり、現在の貴族やジェントリの中にも、その出自を辿れば商人層の出である家が多い (Defoe [1725c] 2007, 240-42)。そのためあって、商人層の社会的地位は他国におけるよりも卑しいものではないとデフォーはいう。イギリス社会では、商業が財を成し家名を上げるための最も確実な手段である。さらには、商業こそがイギリス社会にあってジェントルマンを産出する基盤である (Defoe [1725c] 2007, 242-43)。それゆえ、イギリス社会においては、「ジェントルマン商人」という呼び名もそれほど不自然には聞こえないとデフォーはいう (Defoe [1725c] 2007, 247)。デフォーは、生育ジェントルマンがその能力と品格との優越性において支配するという社会像を、現実味を帯びたそう遠くない将来のこととして見据えていた (Defoe [1725c] 2007, 247)。

生育ジェントルマン層は、社会の規範としての役割を果たすことで、社会の腐敗を匡正することが期待される。下層の人々や後進の人々がみな生育ジェントルマンの生活様式や態度などを模倣することで、ジェントルマンを中心とする社会秩序が再構築される。デフォー思想とは、こうしたジェントルマン層の有徳性に基づく統治の再構築を志向するものである。もちろんデフォーの想定する生育ジェントルマンとは、実質的な中流層の台頭ということの是認論でもある (Shinagel 1968, 96)。しかし、あくまでデフォーの理想とする社会秩序の在り方とは、新たに台頭してきた中流層が、やがてはその人格や財力などの優越性から自然なかたちで社会を

指導するジェントルマン層としての地位を確立していくことで生成されてくる社会的な階序の枠組みのことである。この点で、デフォーの社会思想には、ジェントルマン支配の再建を志向するという側面が確認できる。

## 2. 消費の階序とジェントルマン支配

名実ともに正真のジェントルマンたる資質や実力を備えた諸個人が社会の経綸を示し、その実行についての責務を担うことが望ましいとデフォーは考えていた。生育ジェントルマンによる有徳的な支配である。それではなぜ、ジェントルマン層はその有徳性を明示的に保持することが可能となるのであろうか。

そもそも、デフォーによるジェントルマン支配の秩序論とは、奢侈という経済行為の悪徳性をジェントルマン層の有徳性をもって抑制しようとするものであろうか。換言するならば、その秩序論は、デフォー奢侈論の方向性が道徳論によって経済論としての奢侈是認論を論駁することを示唆するものであるか。以下に見るように、答えは否である。デフォー思想の論理が志向する社会秩序の方向性とは、それとは違うかたちのものである。というのも、経済行為を促進して富裕を実現することこそ、社会の腐敗を匡正するための確実な方途であることをデフォーは明確に認識していたからである。その上で、諸個人の私的利益に基づく経済行為というものに有徳性を付帯させることが可能であれば、社会秩序の安定性という公益は、諸個人の経済的な関係性に内生的な原理として達成されることとなる。デフォーの論理は、こうしたいわば経済発展に伴う社会秩序の形成という可能性を模索するものである。とするならば、デフォーは、むしろ経済論としての議論枠組みのうちに道徳論を包摂しようとしたといえる。奢侈論をめぐる道徳論と経済論とのデフォー思想の二面性という問題は、ここにおいて、経済発展論というかたちでの解決のための方途が見え

てくることとなる。

デフォーは、「正直であるから、その人が富裕になるわけではない。その逆で、その人が正直なのは、富裕であるからである」(Defoe [1704-13a] 1938, 302 (8)) と述べる。貧しさが盗みを生むともデフォーはいう。デフォーにとって、人間とは、まさに衣食足りてはじめて礼節を知る存在である。そのことからすれば、道徳性の問題とは、その議論の基底部分において経済論が不可欠とされる。社会が腐敗し、悪徳行為や犯罪などが蔓延するのは、経済が沈滞していることがその原因であるとデフォーはいう。経済の沈滞が人々の生活を困窮させ、「困窮ということが、人々の心から、交友の情や愛情、正義の感覚、そして道徳と信仰に関わる一切の義務感というものを除去していく」(Defoe [1704-13a] 1938, 302 (8)) のである。この点において、デフォーにおける道徳論は経済論との接合が要請されることとなる。

既述のように、デフォーにとっての真のジェントルマン階層たる基準とは、諸個人の資質や能力、経済的成功にかかわる問題であり、そうした個人的要因の上に後天的に獲得される社会的地位のことである。この点において、デフォーの議論における経済論の第一義性が看取できる。つまり、ジェントルマンが自身の行為を通じて、道徳性やそれに由来する統治性を体現できるのは、その経済的成功に基づく富の優位性を保持しているからである。デフォーはこう述べる。

確かに腐敗した基準であるが、家柄の判断基準はその富がすべてとするのが時代の風潮である。したがって、今日では資産や家財道具など家柄の付録物について語らずに血筋の高貴さや古さを語ることは、その場の軽蔑と嘲笑を買うことになる。(Defoe [1704-13b] 2003-07, 59 (3))

こうした言述からは、デフォーにとって社会秩序の構成力とは、富という経済力に由来する統治性に帰されるものであるということが分かる。

このように、デフォーのいう諸個人の有徳性は、経済力の裏づけがあってはじめてその発揮のためのひとつの条件が備わることになる。ただしそれはただ富裕な境遇にあるということでは自然に備わる条件ではない。もしそうであるとすれば、デフォーのいう生得ジェントルマンであっても、その生まれながらの富裕という条件が彼らを有徳な人間とすることとなろう。それでは、デフォーによるジェントルマンに関する区別は意味を成さなくなる。

人間本性に由来する生存という欲望がつねに道徳性の基礎として存在する。確かにこれがデフォーの想定する基本的な人間観である。この点からすれば、人間の道徳性ということに関して、デフォー思想における経済論の道徳論に対する優位ということは明らかである。しかし、そのことは人間本性の根本的な悪徳性をデフォーが認めていたということではない。

デフォーのいう人間の悪徳性とは、諸情念の過剰に由来する程度問題である。T. K. ミーアは、道徳論と経済論との相反をめぐるデフォーの議論は、それを詳細に検討してみると、「デフォーのいう悪徳とは、そのほとんどが犯罪行為についてではなく、行為の放縦という意味において使用されていることが分かる」(Meier 1987, 88) ことを指摘している。デフォーによる以下の悪徳論は、このミーアの見解を支持するものである。

人間である以上、だれもが自負や虚栄や自愛心をもっていよう。しかし、それが、他の人々がもつと同程度のものであり、また他の人々がそれを示す場合に同じように示すといったことであれば問題はない。それらはむしろ美德であろう。自負や虚栄や自己愛など

が悪徳となるのは、それが過剰であったり、乱用されたりする場合においてである。そもそも、美德と悪徳とは対のものである。それゆえ、善悪は必ず一緒に考えなくてはならない。どこまでが美德であり、どこからが悪徳であるのか、それを考えることである。人間本性とは、それを光と影の混合としてイメージすると分かり易い。(Defoe [1720] 2007, 61)

悪徳性というもののある性質の過剰や乱用として捉えるデフォーの道德論は、同じジェントルマン層に属する諸個人であっても、なぜ生育ジェントルマンのみが有徳であり得るかという問題に答えを与えている。その理由とは、富裕であるという条件は同じでも、その富裕になる過程において、経済的な成功を収めるために必要な勤勉や節儉などの資質を身につけることができるのは、生育ジェントルマンに限られるためである。富裕であっても、その経済力を奢侈や放蕩などに浪費するようでは、社会の行為規準としての役割を担うことはできないということである。デフォーにおけるジェントルマン支配の構図とは、富裕という経済力、およびその経済力を蓄積する途上で獲得された勤勉・節儉・信用といった有徳な資質、この両方を兼ね備えた諸個人の集合である正真のジェントルマン層が社会の中での牽引役を務めることで、その経済力の優位を規準とする階序が形成されるといった社会をその理念型とするものであったことが分かる。そして、このジェントルマン支配の社会にあっては、消費が、その秩序を形成するための枢要な機能を果たすこととなる。次にその論理を見ていく。

市場社会においては、上位権力による強制的な統治方法よりも、諸個人の趣味などに従うことから自生的に統治がもたらされるというような統治の型との親和性が高くなる。統治原理としての行為の自由ということである (Poovey 1998, 27-28)。デフォーはこうした行為の自由

に基づく統治性が市場社会の中で作用しているという点に気づいていたといえる。『イギリス経済の構図』では次のように述べている。

これまでも、あるいはこれから先も、国王や議会在われわれの好みを支配できるものではない。法律を作り、その法律が人々のためになる理由を説明することはできるかもしれない。けれども、われわれに関する2つのこと、すなわち情念と流行とは到底支配できるものではない。(Defoe [1728b] 2000, 257-58 / 訳 1975, 233 / 訳 2010, 192)

デフォーがこうした新たな統治論の必要性を考える中で直面していた問題とは、諸個人の私的利益と社会全体の公益との間の拮抗的調和という18世紀の社会理論が共通に抱えることとなった根本問題のことであった。デフォー思想における道德論と経済論との不整合の問題の本質もまさにこの点にあるといえる。デフォーの場合には、この問題が諸個人の行為における経済的利益と社会的な道德(統治)性との拮抗として捉えられたのである。

統治原理としての行為の自由ということが支配的となる市場社会にあっては、諸個人の消費ということが重要となる。諸個人の統治性の基準である趣味とは、その規範性が経済行為として顕示されてはじめて効力を発揮するからである。この趣味の顕示性は、消費において最も有効に示すことが可能となる。消費における顕示性という機能は、富裕という記号性を表わすときにも同じく有効に作用する。諸個人はその消費の仕方においてその所有する富を顕示することで、富裕であることを社会的に確認することができるからである (Shinagel 1968, 125)。

デフォーは『レビュー』誌において、収入を基準とした社会階層の区分を行なっている (Defoe [1704-13a] 1938, 142 (6))。デフォーはそこで階層を次の7つに区分する。



- (1) 富豪 (The Great) : 豪華に生活する人々
- (2) 富裕 (The Rich) : 裕福に生活する人々
- (3) 中流層 (The middle Sort) : 暮らし向きのよい人々
- (4) 勤勉な商工業者 (The working Trades) : 勤労を要するが生活には困らない人々
- (5) 借地農その他の地方住民 (The Country People, Farmers, &c.) : 過不足なく暮らす人々
- (6) 貧民層 (The Poor) : 厳しい暮らしの人々
- (7) 困窮層 (The Miserable) : 悲惨な状態にあり、生活が窮乏している人々

この階層区分の仕方について、P. J. コーフィールドは、「伝統的な社会階層区分ではなく、デフォーは職業や所得水準、それに消費様式に基づいて実質的な区分をしている」(Corfield 1991, 115) 点に注目している。川北が指摘するように、デフォーが目にした18世紀のイギリス社会では、「一方での所得の高と質、他方での消費の型こそが社会的地位の基準」(川北 1983, 275) とされたのである。デフォーは、こうした貨幣経済における諸個人の経済的影響力に基づく階層的秩序の再編過程という新たな社会秩序の出現を的確に把握していたといえる。

経済力に裏打ちされた有能かつ有徳な諸個人による支配というものに、デフォーは新しい社会秩序の可能性を見ていた。その秩序の統治原理は、諸個人の行為の自由に基づくものである。それはまた、経済活動の自由として、勤労を拡大し、消費を洗練化することで社会の経済発展を主導する原動力ともなる。この社会にあっては、富という経済力の優位性を基準とする階層区分が諸個人の社会的地位を支配する。諸個人は、その消費の仕方においてその優位性を顕示することが可能となる。消費様式の差異によって成立する統治性の構図、すなわち、消費の階層というひとつの文化的な制度がここに構築さ

れることとなるのである。

## V 結び

以上、ここまでデフォーの奢侈論にまつわる議論の二面性について考察してきた。それは、デフォーのジェントルマン論を導きの糸として、社会秩序との関係において、奢侈(消費)についてのデフォーの所論を検討するものであった。そこからは、市場経済を中心とする新たなイギリス社会の枠組みにあって、諸個人の消費行為が道徳的および経済的な2つの機能を併せもつことが明確になった。デフォーの奢侈論とは、消費という行為がもつこの2つの社会的機能の論理をひとつの社会理論としての確に捉えるものであったとの理解が本稿を通じての結論である。道徳論と経済論とは、デフォー思想の基底において経済発展論というかたちを取って整合的に結びついている。というよりも、論理としての強固な連結は、むしろその奢侈論の展開において最も顕著であるとさえいえる。デフォーは、奢侈という問題を考える中から、諸個人の消費行為を中心とする新たな社会秩序の構成原理を見出すこととなったのである。

鈴木康治：早稲田大学国際言語文化研究所

## 注

- 1) 同時期イギリスの奢侈論争の展開については、Sekora (1977) を参照。
- 2) S. パートの議論は、こうしたデフォーの曖昧性を政治論としての不徹底さとして捉える視点を提供している。パートによれば、デフォーとマンデヴィルの両者は、H. サッシュェバレルやJ. スウィフトらと共に、当時の低教会派の道徳論を批判するという点においてその立場を同じくするものである (Burt 1992, 57)。ただし、その中でひとりマンデヴィルのみが根本的な批判枠組みとして、悪徳の政治論を立論するものであり、デフォーを含む他の3人は依然として徳の涵養を重視する従来の議論枠組みに立つ批判に止まるものであったとしている (Burt 1992, 61)。W.

- A. スペックは、デフォーやマンデヴィルらの主たる論駁対象とはJ. ウッドワードやE. ステイリングフリートなど風紀改善協会を擁護する言説であったことを指摘している (Speck 1975, 68-69, 77).
- 3) J. マクヴィーは、デフォーの人間本性論におけるロチェスターからの影響の大きさを指摘する。デフォーはおもにロチェスターを通じてホップズ的な人間観を摂取したとマクヴィーは述べている (McVeagh 1974, 335)。C. H. フリンは、デフォーが欲望を身体および政治体における病気・不健康として捉えていた点を指摘して、こうした欲望論の系譜はロックに遡ることが可能で、デフォーと同時期の論者としては、マンデヴィル、ウッドワード、G. チェイン、スウィフトなどの系譜に属するものであるとしている (Flynn 1990, 45)。このフリンの見解は、生命の安全・平和というホップズ・ロック的な自然法および社会契約論よりも一歩踏み込んだ欲望論の存在をデフォー思想の中に見出そうとするものである。他方で、デフォーの人間本性論解釈の方向性として、こうした物質的な欲望ではなく、精神的な欲望の重要性を指摘する学説もある。その代表者はG. A. スターである。スターはデフォーの物語の形式における宗教指導書や個人主義的な決疑論の影響を指摘して、デフォー文学作品の人間類型における宗教倫理や精神性の優位を論じている (Starr 1965, 72; Starr 1971, 33)。このスターの所論は、道徳論と経済論との二面性というデフォー思想の問題を、精神 (宗教) 論の下に統合する論理を提供するものである (Starr 1971, 160)。また、ピューリタンの個人主義と、その世俗化としての物質主義的な経済論との競合がその物語構造に体现化されているという点こそ、デフォーに小説という新しい文学形式の形成を可能ならしめた要因であるとI. ワットは論じている (Watt [1957] 2001, 83)。
- 4) I. ヴィッカーズは、教育、とりわけ実験科学など当時の新しい学問をデフォーが重視する傾向について、それがF. ベーコンの衣鉢を継ぐR. ボイルなどイングランド王立協会的なベーコン主義の影響であることを論証している (Vickers 1996, 55-80)。デフォーは、I. ニュートン、ロック、ボイルの名を挙げて、ジェントルマン教育の範例としている (Defoe [1890] 2006, 69)。ワットは、デフォー思想における個人主義的な傾向にベーコン主義の影響を見る。ワットによれば、ベーコンやホップズ、ロックなどのイギリス経験論の系譜が個人主義的な影響をデフォーに与え、文学上の流れとしてJ. アディソンやR. スティールらと共にデフォーは経済的な個人主義を是認する立場を作っていたとされる (Watt [1957] 2001, 61-62)。デフォーに見られるベーコン主義の影響は、その事象記述 (歴史) 法においても顕著であることをR. メイヤーは指摘している (Mayer 1997, 158-80)。さらに、ベーコン主義の影響が、その非国教徒としての生い立ちとも相俟って、国制や社会秩序の考え方に対するデフォー思想の政治的な保守性を形成している点についてはSchonhorn (1991) を参照。
- 5) デフォーは流行という語を定義して、「自分より上位の人々、もしくはそう思われている人々を模倣することへの自負」(Defoe [1725b] 1869, 440) であるとしている。
- 6) 勤労の成果としての高賃金に関しては、経済活動の促進や雇用の創出などその国内商業 (inland trade) へ与える好影響を指摘することで、デフォーは肯定的な見方を示している (Defoe [1725c] 2007, 250-51)。ただし、それはあくまで国内商業の発展というかたちで、国益の増大に寄与する限りでの高賃金論である点に留意する必要がある。というのは、国益の増大を第一義とする17・18世紀の重商主義的な政策枠組みにあって、貿易差額など国際関係まで含めた議論の段では、デフォーの賃金論も、当時の趨勢であった低賃金論に与するものであったからである。同時期イギリスの賃金論の諸特徴については、Furniss ([1920] 1965) を参照。
- 7) ちなみに、商人層以外に、生育ジェントルマンとなり得る子孫を持つ可能性のある職業分野として、デフォーは、法曹界や軍事、海運、金融 (証券) 業などを挙げている (Defoe [1890] 2006, 257-58)。
- 8) デフォーは『イギリス経済の構図』の中で、

イギリス国内で消費される交易品の品目をより詳細に列挙している (Defoe [1728b] 2000, 165-66 / 訳 1975, 82-83 / 訳 2010, 64-65)。

- 9) K. ウィルソンは、植民地交易とは、イギリス社会を政治・経済・文化など広範にわたり大きく変容させるものであったことを指摘して、その主な変容として次の2点を挙げている。すなわち、輸入奢侈品の氾濫による消費生活の変容、および植民地関連の投資が増大する中で植民地利害に関わる文物への関心の高まりという点である (Wilson [1995] 1998, 56)。ここにおいて、商業 (重商主義) と植民地帝国とは、広範な社会階層の人々にとっての関心事となることによって、次第に、その推進のための強固な政策的基盤が国民の利害として確立されていくこととなる。

#### 参考文献

- Andersen, Hans H. 1941. The Paradox of Trade and Morality in Defoe. *Modern Philology* 39 (1): 23-46.
- Birdsall, Virginia O. 1985. *Defoe's Perpetual Seekers: A Study of the Major Fiction*. Lewisburg: Bucknell Univ. Press.
- Burt, Shelley. 1992. *Virtue Transformed: Political Argument in England 1688-1740*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Corfield, Penelope J. 1991. Class by Name and Number in Eighteenth-Century Britain. In *Language, History and Class*, edited by P. J. Corfield. Oxford and Cambridge: Basil Blackwell: 101-30.
- Defoe, Daniel. [1697] 2002. *An Essay upon Projects*. McLean: IndyPublish.
- . [1698] 2007. The Poor Man's Plea. In *Religious and Didactic Writings of Daniel Defoe: Volume 6*, edited by J. A. Downie. London: Pickering and Chatto: 21-37.
- . [1704-13a] 1938. *Defoe's Review: Reproduced from the Original Edition, in 9 volumes*, edited by A. W. Secord. New York: Columbia Univ. Press.
- . [1704-13b] 2003-07. *Defoe's Review 1704-1731 in 9 volumes*, edited by J. MacVeagh. London: Pickering and Chatto.
- . [1720] 2007. *The Commentator*. In *Religious and Didactic Writings of Daniel Defoe: Volume 9*, edited by P. N. Furbank. London: Pickering and Chatto.
- . [1724] 2007. *The Great Laws of Subordination Consider'd*. In *Religious and Didactic Writings of Daniel Defoe: Volume 6*, edited by J. A. Downie. London: Pickering and Chatto: 39-193.
- . [1725a] 2004. *Everybody's Business is Nobody's Business*. Whitefish: Kessinger Publishing.
- . [1725b] 1869. Fashion, a Cause of National Degeneracy. In *Daniel Defoe: His Life and Recently Discovered Writings Extending from 1716 to 1729 in 3 Volumes*, edited by William Lee. London: John Camden Hotton: 439-41 (3).
- . [1725c] 2007. *The Complete English Tradesman*. Dodo Press.
- . 1727. Letter 62. In *A Collection of Miscellany Letters, Selected out of Mist's Weekly Journal 1722-27, 4 volume*. Eighteenth Century Collection Online, Gale Group: 234-39 (4).
- . [1728a] 2000. *Augusta Triumphans: or, the Way to Make London the Most Flourishing City in the Universe*. In *Political and Economic Writings of Daniel Defoe: Volume 8 Social Reform*, edited by W. R. Owens. London: Pickering and Chatto: 259-87.
- . [1728b] 2000. *A Plan of the English Commerce, Being a Compleat Prospect of the Trade of This Nation, as well as Home Trade as the Foreign*. In *Political and Economic Writings of Daniel Defoe: Volume 7 Trade*, edited by J. MacVeagh. London: Pickering and Chatto: 115-341. 山下幸夫・天川潤次郎訳『イギリス経済の構図 (初期イギリス経済学古典選集5)』東京大学出版会, 1975. 泉谷治訳『イギリス通商案—植民地拡充の政策』法政大学出版局, 2010.
- . 1730. *A Brief State of the Inland or Home Trade, of England; and of the Oppressions It Suffers, and the Dangers Which Threaten It from the Invasion of Hawkers, Pedlars, and Clandestine Traders of all Sorts*. London: Printed for Tho. Warner.
- . [1890] 2006. *The Compleat English Gentleman*. Whitefish: Kessinger Publishing.
- Dijkstra, Bram. 1987. *Defoe and Economics*. New York: St. Martin's Press.
- Earle, Peter. 1977. *The World of Defoe*. New York: Atheneum.
- Flynn, Carol Houlihan. 1990. *The Body in Swift and Defoe*. Cambridge, UK: Cambridge Univ. Press.

- Furniss, Edgar S. [1920] 1965. *The Position of the Laborer in a System of Nationalism: A Study in the Labor Theories of the Later English Mercantilists*. New York: Augustus M. Kelley.
- Lee, William. 1869. *Daniel Defoe: His Life and Recently Discovered Writings Extending from 1716 to 1729 in 3 Volumes*. London: John Camden Hotten.
- McVeagh, John. 1974. Rochester and Defoe: A Study in Influence. *Studies in English Literature 1500-1900* 14 (3): 327-41.
- Mandeville, Bernard. [1714] 1988. *The Fable of the Bees: or, Private Vices, Publick Benefits*, edited by F. B. Kaye. Indianapolis: Liberty Fund. 泉谷治訳『蜂の寓話—私悪すなわち公益』法政大学出版会, 1985.
- Mayer, Robert. 1997. *History and the Early English Novel: Matters of Fact from Bacon to Defoe*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Meier, Thomas Keith. 1987. *Defoe and the Defense of Commerce*. University of Victoria: English Literary Studies.
- Moore, John Robert. 1958. *Daniel Defoe: Citizen of the Modern World*. Chicago: Univ. of Chicago Press.
- . 1975. Mandeville and Defoe. In *Mandeville Studies: New Explorations in the Art and Thought of Dr. Bernard Mandeville (1670-1733)*, edited by I. Primer. The Hague: Martinus Nijhoff: 119-25.
- Novak, Maximillian E. 1963. *Defoe and the Nature of Man*. London: Oxford Univ. Press.
- Poovey, Mary. 1998. *A History of the Modern Fact: Problems of Knowledge in the Sciences of Wealth and Society*. Chicago: Univ. of Chicago Press.
- Schönhorn, Manuel. 1991. *Defoe's Politics: Parliament, Power, Kingship and Robinson Crusoe*. Cambridge, UK: Cambridge Univ. Press.
- Sekora, John. 1977. *Luxury: The Concept in Western Thought, Eden to Smollett*. Baltimore and London: Johns Hopkins Univ. Press.
- Shinagel, Michael. 1968. *Daniel Defoe and Middle-Class Gentility*. Cambridge, Mass.: Harvard Univ. Press.
- Speck, W. A. 1975. Mandeville and the Eutopia Seated in the Brain. In *Mandeville Studies: New Explorations in the Art and Thought of Dr. Bernard Mandeville (1670-1733)*, edited by I. Primer. The Hague: Martinus Nijhoff: 66-79.
- Starr, George A. 1965. *Defoe and Spiritual Autobiography*. Princeton: Princeton Univ. Press.
- . 1971. *Defoe and Casuistry*. Princeton: Princeton Univ. Press.
- Vickers, Ilse. 1996. *Defoe and the New Sciences*. Cambridge, UK: Cambridge Univ. Press.
- Watt, Ian. [1957] 2001. *The Rise of the Novel: Studies in Defoe, Richardson and Fielding, with an Afterword by W. B. Carnochan*. Berkeley and Los Angeles: Univ. of California Press.
- Wilson, Kathleen. [1995] 1998. *The Sense of the People: Politics, Culture and Imperialism in England, 1715-1785*. Cambridge, UK: Cambridge Univ. Press.
- 天川潤次郎. 1963. 「デフォーの奢侈論」『経済学論究 (関西学院大学)』17 (2): 73-97.
- . 1966. 『デフォー研究—資本主義経済思想の源流』未来社.
- 川北 稔. 1983. 『工業化の歴史的な前提—帝国とジェントルマン』岩波書店.
- 山下幸夫. 1968. 『近代イギリスの経済思想—ダニエル・デフォーの経済論とその背景』岩波書店.



## Reconsidering Defoe's Theory of Luxury: In Terms of His Discourses on the English Gentry

Koji Suzuki

Defoe definitely agrees that luxury is a vice, though he also recognizes that luxury as a consumptive action entails economic benefits for the political society. Furthermore, he realizes that the conspicuousness of riches in consumptive actions can have morally restraining effects on the common people.

The central theme of this article is to distinguish Defoe's implications for the consumption theory from his discourses on luxury. For this purpose, it is expedient to focus on Defoe's considerable regards for the English gentry, because it can clarify his luxury discourse in the social context wherein luxury is to be clearly comprehended as a consumptive action. When logically integrated with the gentry discourse, the luxury discourse represents the consumption theory in

eighteenth-century England. Moreover, it is notable that morality is included in economic activities in Defoe's luxury discourse.

Defoe struggles to find a cohesive logic in his social theory closely relevant with the structural change of his time. In this contemporary dynamics, it is the gentry comprising virtuous individuals with riches and intelligence that he expects to find as the leading entity governing the new hierarchical order to be settled with the quality and quantity of their consumptive actions. Thus, it is safe to say that Defoe's theory of consumption correctly grasps the social order newly established in eighteenth-century England.

JEL classification numbers: B 31, Z 19.